

# 鳥獣駆除にAI・ドローン

## 岡山・真鍋島で実証

岡山県笠岡市の離島・真鍋島で人工知能（AI）やドローンを組み合わせた鳥獣被害対策の実証調査が大詰めを迎えている。建設コンサルタントのエイト日本技術開発（岡山市）やシステム開発のシステムズナカシマ（同）、地元の駆除グループなどが協力。人口減少や高齢化で担い手の確保が難しくなる中、農作物被害などが拡大しやすい離島の特性を踏まえ、他地域にも応用できるモデルを築く。

## 企業・地元グループが参加

「ウーワンワン、ウーワンワン」。1月19日、瀬戸内海に浮かぶ真鍋島。上空を飛ぶドローンのスピーカーが犬のほえるような音を十数分流し続ける。動物駆逐用煙火も発射して乾いた破裂音が響く。外周8キロほどの同島に繁殖し始めたイノシシを駆除するための飛行訓練だ。

## 離島での対策モデルに

## 中国圏 レポート

2023年12月の集中対策では追い込み切れなかったためドローンの発着基地を変更するなど修正し、24年2月の2度目の実証に備える。

人口150人ほどの真鍋島にもともとイノシシはいなかった。「この2、3年で目撃することが増えた」（住民男性）。軟らかい土を掘り返しミミズを食べるといふ。ホウレンソウやジャガイモの菜園を荒らされたある家庭では電気柵を設け、作業中はラジオをかけて鈴も鳴らして警戒する。島内は道幅が狭く、遭遇すれば逃げにくい。

2023年12月の集中対策では追い込み切れなかったためドローンの発着基地を変更するなど修正し、24年2月の2度目の実証に備える。

人口が減る中、鳥獣駆除の担い手が不足し高齢化が進むのは全国に共通する。デジタル技術を導入し、日常的な鳥獣対策として「持続可能な離島モデルを確立する」（エイト日本の松島進氏）。23年10月から本格展開する実証調査の狙いだ。

海に囲まれた離島はイノシシにとっても逃げ場が限られる。ドローンによる追い込みのほか、集落の周辺部ではくくり罠（わな）20カ所と運動する「鳥獣ワナ監視通報システム」を導入。罠の振動を検知すると、捕獲情報としてリアルタイムでメール通知する。低周波や高周波を出して威嚇する装置（いのドン）も2基配置し、イノシシの行動範囲を狭めていく。

「毎日、罠の見回りをするのは肉体的にもきつい」（鳥獣駆除グループの1人）。監視通報システムの活用で、例えば見回りを週に1回に減らせれば負担減だけでなく鉢合わせる危険も減る。

主要な獣道などには簡易カメラ12基を設置した。AI画像解析システムで鳥獣の確認頭数を自動集計し、生息・行動状況を地図上にわかりやすく表示するなど鳥獣情報を一元管理する。罠の配置の最適化などでイノシシの捕獲数は1・5倍程度に増えているという。

真鍋島の実証調査ではエイト日本をとりまめ役として「真鍋島スマーティアランド協議会」を組織。ドローンやデジタルトランスフォーメーション（DX）に強いシステムズナカシマ、AI解析などの電気興業（東京・千代田）といった企業のほか、岡山理科大学や

地元猟友会も加わる。継続できる対策にするため、ドローンの操縦は駆除グループと猟友会の主要メンバーが研修を受け資格を取得した。協議会では「DXやクラウド技術を駆使して、実地調査から得られた成果と課題を踏まえ、他の島々への取り組みにつなげた」。対策の有効性、継続性、組織づくりなどについて23年度中にまとめる予定だ。（深野尚孝）



真鍋島でイノシシを追い込むドローンの飛行訓練を実施した（2024年1月、岡山県笠岡市）



山林に設置したカメラで鳥獣の行動状況を分析する（岡山県笠岡市）